NOV 2 1. 1984


# 佐伯史談

第八十三号

「郷土史研究」誌通算第百五号

昭和四十七年七月六日

佐伯史談会

事務所 佐伯市大字稲垣字龍護寺 羽柴方


主張

## 佐伯の自然と文化財を守る会を結成しよう

佐伯史談会長　高木嘉吉

標記については前号で羽柴副会長が提唱しているが、再び所信を述べて会員諸子の賛同を得たい。

我々は郷土史探訪の旅を続けているが、それは佐伯の自然を舞台とした、長い時代にわたる人々の活動の跡を訪ねることである。人々の活動は文化活動であり、其の足跡は文化財として残されている。

河川改修や宅地造成工場の進出等で、ここ十年の間に佐伯の自然は随分姿を変えた。河川改修は流域を氾濫から守るためで、それはそれなりに目的を達して、地域住民を洪水禍から解放したが、丈夫な護岸工事と大きな堤防に囲われた河川は親しみ難く、足許にさらさら流れた春の小川がなつかしい。栂牟礼城史になじみ深い木戸瀬川や、天正の末の堅田合戦の舞台となった汐月付近の大越川は姿を変えて、「瀬登りの太刀」や「堅田合戦」の話をする際は、先ず昔の川の説明に長い時間を費やさねばならない。

宅地造成では、各所で山の尾根がけずりとられて、赤茶色の山肩が剥き出しになり、緑が失なわれているのはいたいたしい。

工場の進出は田畑をつぶし、山をけずって止まるところがない。佐伯から中の谷トンネルまで、

"道をはさんで
畑一面に
麦は穂が出る
菜は花盛り"

といった風景は、殆んどなくなってしまった。

こうした勢で、全国的に又地球上緑が失われ、人口が激増し、穀物から工場から家庭から、大気汚染の排出物が放出されては、自然浄化の天の摂理のバランスが破れて、人類滅亡の日を迎えることになろう。スモッグに


本号目次

主張　佐伯の自然と文化財を守る会を（高木嘉吉）一
小論　郷土史は歴史である（羽柴弘）二
研究　龍護寺野文雄先生（山内武麟）三
〃　猪方惟栄と惟庸（佐脇貞一）八
資料　御仕置五人組帳（岩田善市）一一（本誌と五人組帳と整理と正義）二六
資料　猪垣の築造と灰塚の開発　一七（羽柴浦庄屋古文書（安部弥左衛門））
資料　井溝整備のお達示（河野松男）二
手記　尖宗寿禅師の津軍（河野典一）二一
紀行　佩楯山へ登る（羽柴弘）二二
資料　佐伯と国木田独歩（山本保）二五
紀行　安心院から由布院へ（伊賀重雄）二七
報告　二十六年度決算・本年度事業計画・役員名簿・予算等　三一
四国一周バス旅行案内　三三

苦しむ東京都民のことは対岸の火事ではなく、我々の足許にも寸でに火がついているのである。

地域の自然を守る会が各地で結成されているが、我が佐伯にもこれを結成して、郷土の自然と文化財とを守る中核としたい。そして長い郷土の歴史に於いて、その舞台となつた郷土の自然を、出来るだけ破壊から守り、此処でこんなことがあつたのだと、そのまま説明できる自然と文化財を残したい。

郷土人の誰もがこんな心構えを持つならば、それは大きな力となつて、郷土の自然と文化財の破壊を防止するであろうと信じて、敢て提唱する次第である。

（以上）

（附記）

(1) 佐伯の自然と文化財を守る会のこの結成提唱については、去る七月一日の評議員会に提案、種々検討の結果、住民運動としての盛り上げの困難や土地所有者の権益もからみ、早急実現に無理のあること、十分別府などの実情を調べる要ありとして、研究調査した上で運動を展開しようということになつた。

(2) たまたま同夜、公害追放佐伯市民会議の役員会が開かれたので、その席上にこのことを報告連絡したところ、趣旨を賛同、十分自然を守る会の代表者でも来て貰つて、その結成発足をすゝめてほしいとの希望があつた。

(3) 本誌前号に私が提唱した、郡市全域に亘る監視体勢の強化と、通報！調査に基ずく地域関係者への働きかけ、そうして佐伯史談会、会員による自然と文化財を守る運動を、今の課題としつつ組織化の方向に持つて行きたいと思う。（羽柴）

## 川論

### 郷土史は歴史である

羽柴　弘

郷土史は厳正な歴史である。どうかすると民間の伝承を、そのままの事実と述べたり、単なる想像をつけ加えて、とんでもない創作や物語りを組立て、それがかつてわが郷土の歴史的事実であつたとする。けしからん話である。自分だけがそのように思うのは勝手だが、書いて発表するとなると、世の物笑いとなるのは勿論、読者を誤らせ後世に誤つたことを伝えることになる。

郷土史は厳正な歴史である。だから信頼に足る文書記録があるか、又は現地にこれを充分実証出来る古跡資料があるか、そして歴史的にも位置づけられ、科学的にも無理がなく、充分納得出来るものでなくてはならない。

一、二実例をあげれば、十三重の塔は千代鶴の病気平癒を祈願してという、これは全くの伝説、先年倒壊復元の際骨壺などが出たので、これは明らかに佐伯氏の誰かの供養塔である。

樹年社会誌に寄手二万の大軍は多すぎるし、米で馬を洗つたなど全く作者が他の軍記から勝手に借用しての附け加えであろうし、惟治熱反のことにしても佞臣のざん言というよりも、おしろ惟治の政治的な動きが充分あつたと思われることを重視したい。

我々は興味本位に勝手な憶測を、さも見ていたような文章に書くことをつつしみたい。推理や想像を全然加えるなと言うのではない。識記にも伝承にも歴史的な背景があり、若干の事実もあつたであろう。それはそれなりに参考としてとり上げればよい。然しそれだけで成り立つ郷土史は、まことにたあいもないものである。

すすけてしわになつている古文書を苦労して読んだり、半ば土に埋もり苔におおわれている古塔が文字を丹念にしらべたり、その辺に郷土史の正しい探究がある。（終）